

興福寺東金堂院の発掘調査と南都焼討

目黒 新悟

(独) 国立文化財機構 奈良文化財研究所 研究員 (建築史)

1. 調査の経緯と目的

- 奈良時代創建の興福寺は、度重なる被災を受けても創建期の姿で復興されてきた。しかし、中金堂の享保2年(1717)の被災後は、創建期の復興が叶っていなかった。
- 興福寺は、『興福寺境内整備基本構想』(1998)を作成し、これに基づき伽藍の復元・整備に着手。
- 奈文研は興福寺から委託を受け、伽藍の復元・整備の情報を得るため1998年から発掘調査を実施。
- 2020～2022年の3か年に、この一環で東金堂院(東金堂を囲う区画)の門・回廊などを調査。
- 本日は、顕著な成果を得た2021年(東金堂の西正面)と2022年(東金堂の後方北側)の成果を報告。

2. 東金堂院の概要

- 東金堂院は、従来の想定では東西173尺(52m)、南北371尺(111m)で、西・北面が回廊、南・東面が築地塀で区画され、要所に門が開く形式であった¹⁾。
- 東金堂・五重塔の被災歴は文献史料から判明するが、門・回廊・築地塀については判然としない。
- 発掘調査に向けた準備として、所内で東金堂院に関する文献史料・絵画資料などの検討をおこなったところ、従来の想定より東西規模が広大な可能性が浮上した²⁾。
- 2021年は門と回廊の構造について、2022年は東西規模の確認などを目的として調査することに。

3. 発掘調査の前提と遺構の構造

- 遺跡には、現在までの痕跡(遺構)が残っており、全てが門や回廊にともなうわけではない。
- 発掘調査をするにあたり、地面にどのような遺構が残るかを想定する(図1)。
- ① 門と回廊は基壇に建つ建物。→ 基壇外装や、それを設置ないし抜き取った遺構と基壇土。
- ② 屋根からは雨水が落ちる。→ 雨水を受け流す雨落溝(排水溝)や、その遺構。
- ③ 礎石に柱が立つ建物。→ 礎石や、それを設置ないし抜き取った遺構。

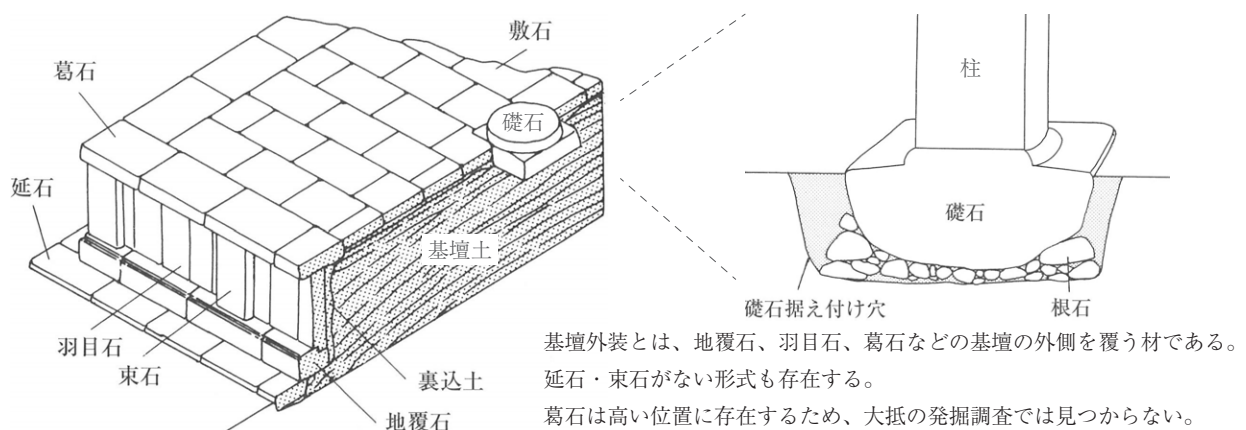


図1 基壇外装と礎石の模式図(『古代の官衙遺跡! 遺構編』奈良文化財研究所、2003から転載)

4. 2021 年の発掘調査（東金堂院 西面の門と回廊の調査）³⁾

- ① 東金堂の西正面に門と回廊が存在したことを確認した（図 2）。
- ② 東金堂の西正面の門と回廊の変遷が判明し、南都焼討の遺構を特定した（図 3）。
- ③ 東金堂の西正面における門と回廊の廃絶後の変遷が判明した。

● **概要:**平家による南都焼討（1180 年）は、歴史上知られている。しかし、その主な被災地となった興福寺境内では、実はこれまで南都焼討の遺構の発見・特定には至っていなかった。2021 年の発掘調査で、ついに興福寺境内で史上初めて、南都焼討の遺構（焼土・炭化木片）を発見・特定した。これにより、文献上だけでなく、発掘遺構・出土遺物との突き合わせからも、興福寺で南都焼討が起きたことが立証された。

5. 2022 年の発掘調査（東金堂院北面回廊の調査）

- 2022 年の現地見学会資料⁴⁾を参照。

6. まとめ

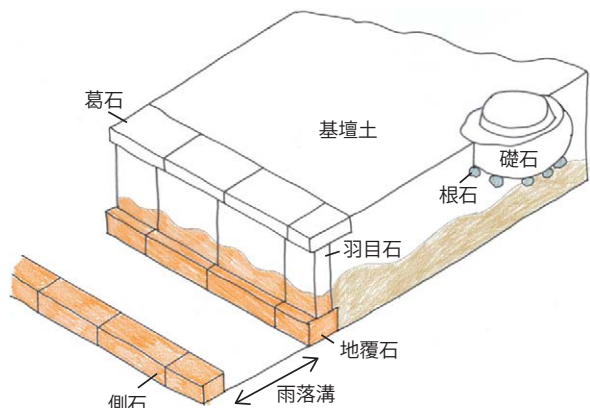
- 2021 年は、ついに興福寺境内で史上初めて南都焼討の遺構を発見・特定した。遺構・遺物からも、興福寺で南都焼討が起きたことが立証された。
→これを基点に、従来の調査成果を再検討できる。
- 2022 年は、東金堂院の東西規模が従来の想定より遥かに大きい、東西 100m 以上であることが遺構から確定した。
→東金堂院の性格を考える上で重要な資料。
- 東金堂院の門・回廊は、南都焼討前後で柱配置・基壇規模に変化がなかったと考えられ、創建期の位置・規模を踏襲して再建されたとみられる。
→ただし、再建後の基壇外装は西正面が切石で、手厚く造られていた（北側面は乱石積）。

参考文献

- 1) 大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966。初出は、大岡實「興福寺建築論（上）」『建築雑誌』（505）、建築学会、1928。
- 2) 山本祥隆・山崎有生「興福寺創建東金堂院の再検討」『奈文研論叢』（3）、奈良文化財研究所、2022。
- 3) 目黒新悟ほか 7 名「興福寺東金堂院の調査 第 640 次」『奈良文化財研究所紀要 2022』奈良文化財研究所、2022 (DOI <https://doi.org/10.24484/sitereports.129169>)。
- 4) 「興福寺東金堂院北面回廊の調査 平城第 649 次調査 現地見学会資料（2022 年 10 月 15 日）」興福寺・奈良文化財研究所、2022 (DOI <http://doi.org/10.24484/sitereports.130041>)。



西面回廊の遺構 北東から（興福寺・奈文研撮影）



復元模式図（色塗りは遺存部分）

図 2 西面回廊の遺構とその復元模式図



図 3 南都焼討の遺構と遺物 北西から（興福寺・奈文研撮影）